

Title	初期福沢諭吉の人種観：S. A. ミッチェル問題
Sub Title	Fukuzawa Yukichi's view of human being and his racial perception in the early part of his life : S. A. Mitchell and Fukuzawa Yukichi
Author	姜, 兌玢(Kang, Tae-Youn)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会
Publication year	2017
Jtitle	法學政治學論究：法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.114, (2017. 9) ,p.129- 158
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20170915-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初期福沢諭吉の人種観

— S. A. ミツチエル問題 —

- 一 はじめに
- 二 福沢とミツチエル
 - (一) *School Geography* と *New School Geography*
 - (二) 初期福沢の問題意識とミツチエル
 - (三) ミツチエルの人間観
 - 1 宗教
 - 2 人種観
 - (四) 福沢の著作に現れるミツチエルの影響
- 三 初期福沢の人間観分析
 - (一) 継承
 - (二) 削除
 - (三) まとめ
- 四 おわりに — 近代性の検討を考える —

姜

兌

琬

一 はじめに

小論は、初期福沢の人間観が「人種観」に近い性質のものであったことに着目し、福沢の人間観を、初期に彼が接した西洋書物との関係を中心に検討することを試みる。小論で言う「初期」は、西洋の文物を日本に積極的に紹介した時期を指す。初期福沢の著作は一般的な西洋の知識を伝えるものが多かったが、一八七二（明治五）年に初編が出た『学問のすゝめ』は、それ以前の福沢の著作に比べて西洋書物の単なる翻訳ではなく、福沢の主張が明確に表れているため、著作活動の転換点と言えるような著作であった。そのため小論では『学問のすゝめ』より前までを福沢著作活動の「初期」とする。松沢弘陽は「コンモン・エヂュケーション」⁽¹⁾という福沢の言葉を借りて、このような「コンモン・エヂュケーション」のレベルの西欧の書物に親しんで来た時期⁽²⁾が存在したと述べている。小論でいう「初期」も、この「コンモン・エヂュケーション」の時期と類似している。

福沢の初期著作の中で、彼が最も影響を受けた西洋著作の一つが地理学者ミッチェル⁽³⁾ (Samuel Augustus Mitchell, 1792-1868) が書いた *School Geography* と *New School Geography* である。この二冊は、当時アメリカで広く用いられた地理教科書の旧版と新版であった。福沢は『西洋事情』初編、『訓蒙窮理図解』、『掌中萬國一覽』、『世界國尽』等多数の著作の中でミッチェルを引用している。注目すべきところは、地理書であるミッチェルの *School Geography* や *New School Geography* に人間という存在の性質についても言及されている点である。それは少ない分量とはいえ、福沢の初期人間観形成に大きな影響を及ぼしている。そこで小論は、ミッチェルの *School Geography* と *New School Geography* を主な分析対象とし、人間観についての福沢との関係を分析することを試みる。

ミッチェルと福沢の関係についての先行研究はクレイグ (Albert M. Craig) の研究が殆ど唯一だと言える。クレイ

グは『文明と啓蒙』⁽⁵⁾第二章で、一九世紀アメリカの地理教科書が福沢の初期著作にどの位影響を及ぼしたかを検証し、福沢がミッチェルの地理教科書の影響を受けたことを明らかにしている。ただし、『文明と啓蒙』でクレイグが主に取り上げている対象は世界を四つの文明水準に区分づけた「文明段階論」に於いてのミッチェルと福沢の関係であった。小論では、主に「人種」に焦点を当てて、ミッチェルの著作から福沢がどのくらい影響を受けたかを分析する。

二 福沢とミッチェル

(一) *School Geography* と *New School Geography*

ミッチェルは、一九世中葉のアメリカでもっとも有名な学校地理教科書の著者である。複数の地理教科書、地図、それらに付随する手引書を制作し、彼の書いた地理書は何世代もの生徒たちに用いられた。⁽⁶⁾既存の地理教科書の不完全性に気づいたミッチェルは自ら教科書を書くことにし、彼の教科書は毎年四〇万部以上の売り上げを記録した。⁽⁷⁾ミッチェルは教科書以外にも、*General View of the World* (1846)、*American Traveller* (1851)、*Universal Atlas* (1851) など、二四点の著作を出版した。

福沢が読んだとされるミッチェルの著作は *School Geography* と *New School Geography* とある。⁽⁸⁾ *School Geography* は一八三五年出版されて以来、少なくとも一八六八年までは次々と版を重ねた。⁽⁹⁾ *New School Geography* は *School Geography* の改正増補版として一八六五年に出版され、現在一八七二年までの版本が確認されている。新版の導入部には旧版との違いとして「全く新しいテキスト、地図、イラストレーション」⁽¹⁰⁾ が挙げられており、旧版と新版の間には内容的に大きな違いはないが、人口や面積などの数字は頻繁に更新されている。それは新版と旧版の間だけでなく、

例えば同じ旧版であっても出版年度によって数字など細かい記述は更新され、最新の情報を反映している。主張の強弱はあるものの、新版と旧版の内容面の違いはないこと、そして福沢が *School Geography* と *New School Geography* を両方とも読んだことが確認されているため、小論ではこの二つの書物を特に区別せずに分析しながら、注目すべき点が現れる場合触れていく。

クレイグの検証により、福沢が読んだのは *School Geography* の一八五二〜一八六五年の間に刊行された版、*New School Geography* の一八六六年版であることが確認されている。⁽¹⁰⁾ 小論で使用した資料は、主に *School Geography* の一八六一年版、*New School Geography* の一八七二年版で、その他に *School Geography* の一八五六、一八六〇、一八六六、一八七〇年版、そして *New School Geography* 一八八二年以降と推定される版⁽¹¹⁾を参考にしながら分析を行う。

(二) 初期福沢の問題意識とミッチェル

ミッチェルは初期福沢の著作で欠かせない存在であった。初期福沢の問題意識は、特定の西洋思想家の著作を引用し、それをもとに自分の思想を作り上げて唱えることなく、西洋の「一般的」な事情を伝えることであった。多くの福沢の初期著作には、「西洋」が具体的にどういったもののかを十分知らずに、ただ批判を加える人に対しての福沢の批判がしばしば見られる。これが当時福沢の著作活動においての問題意識であり、あまり知られていない西洋について詳細な情報提供を行っているところが福沢の初期著作の独自性でもあった。三度にわたって西洋を経験し、豊かな知識を積んできた福沢は、『西洋事情』、『西洋旅案内』、『條約十一國記』等の著作を通して、自分が身につけている豊富な知識を紹介した。

その中で福沢が最も影響を受けた一人がミッチェルであった。*School Geography* を入手して読んだ福沢は、少なくとも『西洋事情』初編を書いた一八六六（慶應二）年からそれを活用し、『訓蒙窮理圖解』、『掌中萬國一覽』、『世界

図1 『訓蒙窮理図解』



図2 *New School Geography*



図4 *New School Geography*



図3 『世界國尽』



『國尽』等、兵書を除いた初期著作の殆ど全てにミッチェル地理書を引用している。⁽¹²⁾のちの『文明論之概略』でも述べられている「文明諸段階論」も、初期福沢の著作から既に頻繁に取り上げられており、その元となる書物がミッチェルの地理書であり、福沢はその内容を『掌中萬國一覽』、『世界國尽』で既に引用している。また直接引用の痕跡が見当たらない『西洋旅案内』、『条約十一國記録』においてもその内容的類似性が見られる。つまり、「コンモン・エヂュケーション」時代全般にかけて、福沢は(旧版と新版を含めた)ミッチェルの地理書を読み、引用し、その内容を熟知していたことが確認できる。

さらに、福沢の初期著作に使用された挿絵の多くがミッチェルの地理教科書の引用であることも、福沢がミッチェルに深く影響された証拠である(図1〜4参照)。⁽¹³⁾

(三) ミッチェルの人間観

この章では、ミッチェルの地理書に人間についてどういったことが書かれているのかを分析する。ミッチェルは、地理学のことを「住民や産物を含めた、地球というものに関する記述」と定義している。⁽¹⁴⁾住民を含めたことにより、地理という科学的な事実だけでなく、人間についての説明も含まれていることが分かる。新版ではさらに体系的な構成をとり、地理学を自然地理、天文地理、政治地理に区分している。⁽¹⁵⁾

基本的に「地理書」という自然科学的性格の書物であるため、自然地理、天文地理、そして世界中の諸国に関する地理的記述などの内容が主である。人間認識分析の手がかりとなる内容は政治地理に関する項目で、「政治制度」、「人種」、「社会の諸段階」、「統治制度」、「宗教」、「言語」項目で構成され、旧版、新版ともに全部で一五ページほどの少ない分量となっている。この内容はしかし、政治地理の章だけでなく、各国の地理的記述にも含まれ、実質的に著作全体に繰り広げられている。ミッチェル地理書はまず前半の約五分の一分量で地理的定義や項目区分が記述され、

次に各国の情報や説明がその項目別になされている。つまり各国の説明部分に地理的位置、面積、人口、産物など自然化科学的知識と共に、人種や社会の発展度合、政治制度等についても記述されている。例えば、英国の説明には「世界で最も重要な国の一つで、英国人の知能、商業、産業はアメリカを除くと右に出るものがない」⁽¹⁶⁾と記述されており、中国については「中国人は秩序、産業、規則を重視するが、彼らの女性への待遇、偶像崇拜、一般道理を無視する態度は国の格を下げ、クリスチャン文明国家以下の格付けとなっている」⁽¹⁷⁾とミッチェルは述べている。

小論が注目するところは、「政治地理」章の中の「宗教」と「人種」項目で、二つともミッチェルの地理書の中で人間認識を把握するための重要な手がかりとなる要素である。続いて登場する「社会の諸段階」も「宗教」と「人種」と関連する重要な内容であるが、既にクレイグが「文明」の観点から研究を残しているため、⁽¹⁸⁾具体的な内容までは触れず、参考として引用する。

1 宗教

ミッチェル地理書には全体的に宗教性が著しく現れており、人間の起源をも宗教から引き出している。それは新版より旧版に顕著に現れていて、旧版冒頭の「生徒への序文」でミッチェルは、「初めに神は天と地を創造された」と聖書の句を引用しながら、「われわれ人間、この地球に存在する全ての物、太陽と月を含めた空を見上げると繰り返し広げられているすべての星など、世界を構成しているすべては神様の仕業によりできている」⁽¹⁹⁾と述べている。本文の地理的定義の記述の後にも、「これは、神様がいかに賢明にこれら全てのものを造ったかがわかる証である」⁽²⁰⁾や、「このような調和は神様の無限な知恵と善意によるもの」⁽²¹⁾など、地球のあらゆる地理的原理や法則が神様の仕業だと述べられている。また「宗教」章でミッチェルは、宗教の定義、神様の性質を明確にしている。宗教は真と偽りに区分され、クリスチャンとイスラム、ユダヤ教が真の宗教であり、それ以外の宗教——バラモン教、仏教、チベット仏教（ラマ

教)——は偽りの宗教だとしている。⁽²²⁾このような宗教区分は、国家間の優越性に帰結され、キリスト教を信じる諸国はそうでない諸国より遙かに優越であり、クリスチャン諸国が行う植民地拡大作業、言論の拡大、宣教師の殉教により、間違はなく、幾世代の間にクリスチャンの影響力はさらに拡大するはずであるとミッチェルは述べている。⁽²³⁾新版では、上述した神様の仕事を賛美する記述はすべて削除され、「宗教」章にも真と偽りの宗教を区分づける記述は削除されるなど、旧版のような濃厚な宗教性は薄まっているものの、神様を「命、幸福を与える存在で、且つ人間行動の審判者⁽²⁴⁾」とし、神様の存在を地理学の基本原理としている。また、クリスチャンの宗教的優越性も相変わらずみられる。⁽²⁵⁾

2 人種観

「人間はアダムとイブから誕生した⁽²⁶⁾」という記述から、「人種」章は始まる。ミッチェルにとってこれは地理学的「事実」である。その上、人種の説明が行われている。福沢は『掌中萬國一覽』に「人種」章を全訳して載せている。ミッチェルはこの章で、神様から誕生した人間はあらゆる理由により全地球に広まり、様々な人種が誕生すると言⁽²⁷⁾う。それを五つにまとめると、コーカサス人(白人)、モンゴル人(黄人)、アフリカ人(黒人)、マレー人(茶人)、アメリカ人(赤人)になる。そのうちアメリカの白人、ヨーロッパ人の属するコーカサス人は最も優越な存在で、アフリカ人は最も未開な人種である。日本はモンゴル人に属している。モンゴル人は黄色で、斜めな目つきをしている。全体的に根性が強く勤勉だが、知能が限られ発展が遅い。中国と日本人の多くがこの人種で、ヨーロッパのフィンランド人とラップランド人の一部がこの人種である。このように、人種の格付けが確実に見て取れる。さらに、「人種」章の次に登場するのは「社会の状態」章で、ここでミッチェルは「人種」章と同じ構成をとり、文明の諸段階を五つに分け、それぞれの段階の説明を具体的な国家の例を挙げながら説明している。文明の諸段階を区分づける基準

は明示されていないが、その記述は人種の格付けと密接に関係する。例えばミッチェルは一番文明度の低い状態 (savage) の国の例として中央アフリカの原住民一部、ニューギニア、オーストラリアを挙げているが、人種の黒人 (ニグロ) の例としてアフリカ、アメリカの奴隷、ニューギニアとオーストラリアを挙げている。また、文明において一番の進歩を成し遂げた国としてアメリカ、英国、フランス、ドイツが挙げられているが、これらはコーカサス人に属する諸国である。文明の諸段階論は福沢の代表的な思想として知られているが、ミッチェルは人種においても類似した段階認識のもとで人種論を展開している。

このように、ミッチェルの人間認識には非平等性、階級性が強く現れている。世界でもっとも優越な人種はアメリカの白人とヨーロッパのコーカサス人で、この人種の人たちは全てクリスチャンであり、最も文明開化の進んだ国を構成している。ミッチェルの地理書の中で、人間は個別的対象として登場することなく、「人種」という自然科学の一部としてとらえられ、文明、宗教と有機的に結合し、格付けされている。「科学対象」として人間を捉えることで、人間は「不変」な性質を持つ存在とされている。つまり「天性」的にそう決まっている存在であり、人間の格付けは後天的な要因で決まったことではなく、先天的、生まれつきの性質を持つていることである。このことは宗教性と結合してさらに固く裏付けされる。ミッチェルは人間が人種別に分かれ、それぞれ違う地域に居住している理由について「分からない」と述べており、人間を含めた地球や宇宙の原理は全て神様の仕業により誕生したと述べている。ミッチェル地理書で科学と宗教は「不変」という共通性のもとに、奇妙に共存している。

(四) 福沢の著作に現れるミッチェルの影響

この章では、福沢の著作に見られる *School Geography* 及び *New School Geography* の影響を分析する。前述のよう、福沢は『掌中萬國一覽』の「人種の論」で、*New School Geography* の「人種」章を全訳している。

殆ど抜けている個所なく原文に忠実な翻訳になっており、人種の外見は原文より詳しく描写されている。⁽²⁸⁾「人種の論」に続いて「蠻野文明の別」、「各国の言語」の順に構成されているが、「蠻野文明の別」も *New School Geography* の「The States of Society」の全訳であること⁽²⁹⁾、また「各国の言語」の内容も *New School Geography* の「Languages」と大部分類似していることからみると、「人種の論」が *New School Geography* の「人種」の全訳であることは明らかである。また、『掌中萬國一覽』にミッチェルの人間観部分の多くを引用していることもこれによって確認できる。

『掌中萬國一覽』にミッチェルの人間観を借用しているということは重要な意味を持つ。『掌中萬國一覽』は、福沢の著作の中でも今でいうポケット版のようなもので、必要な内容を手っ取り早く見つけること、携帯に容易な形をとることが執筆の一つの目的であった。そのため、様々な地理学の内容の中でも重要とされる内容を簡略に記述することが重要で、且つ『掌中萬國一覽』の執筆目的でもあったことを、福沢は冒頭の「凡例」で述べている。⁽³⁰⁾そういった中で、福沢がミッチェル地理書の「人種」と「社会の諸段階」を全訳し、また「言語」の多くを引用して載せていることは、それ程福沢がミッチェルの地理書に親しみ、深く影響を受けていたと言える証拠となる。

『世界國尽』にも、著作全体にかけてミッチェルの影響が現れている。世界を五つの大陸に分け、それに属する諸国の気候、産物、人の性質を記述するという構成はミッチェルの地理書と類似し、さらに各記述の間に挿入している絵の多くをミッチェルの地理書の絵から使用している。また後半の「附録」で福沢が行っている地理学的定義作業も、ミッチェルの引用である。一例として、*New School Geography* の地理学定義と『世界國尽』での地理学定義を比較してみると次の通りである。

「1. What is Geography?

Geography is a description of the surface of the earth. The word Geography is derived from two Greek words, ge, the earth, and grapho, I write. It means, therefore, a writing or discourse about the earth.

2. Of what part of the earth does Geography treat?

Geography treats principally of the surface or outside part. It treats also of the atmosphere which surrounds the earth, and of the various winds and air-currents.⁽³¹⁾

「地理学は西洋の語にて「じようがらひい」といふ。「じよう」は地の義なり。「がらひい」とは書くといふ義なり。故に地理学は、地球上のことを書記し、地球の外面を包む空氣の有様までも説き明らかにする学問なり。⁽³²⁾」

福沢は『西洋事情』初編でみられるように、世界総人口のような数字もミッチェルから引用はしているが、その頻度は少なく、主に概念整理や定義を借用している。人間観念に限らず、世界全般に於いての概念整理まで、福沢はミッチェルから影響を受けていると言つてよからう。

三 初期福沢の人間観分析

(一) 継承

福沢とミッチェルの深い関係性は直接引用文を取り上げることと確認されている。では福沢はミッチェルの人間認識をどのように受け入れ、自分の思想世界に反映しているのか。

福沢の場合、「人種」と「社会の諸段階」、「宗教」が有機的に結合した人間観を見せる。『世界國尽』の「附録」で

福沢は次のように述べている。

「本篇の始にもいへる如く、世界中の人種を五つに分ち、その容貌知愚同じからざれば、その國々の風俗生産の道も亦一樣ならず。⁽³³⁾」

ここで言う「本篇の始」とは、以下の内容である。

「世界中の人の数は凡十億に近し。國々の土風に由て、面色も同じからず、知愚も一樣ならず。其區別を五種に分ち、世界に多少の割合左の如し。

欧羅巴の人種は色白し。其數四億二千萬人。

亞細亞の人種は色少しく黄なり。其數四億六千萬人。

亞米利加の山に住へる人種は色赤し。其數一千万人。

阿非利加の人種は色黒し。其數七千万人。

太平洋に住へる島人は茶色なり。其數四千萬人。⁽³⁴⁾」

「人種を五つに分ち、その容貌知愚同じからざれば、その國々の風俗生産の道も亦一樣ならず。」から確認できるように、人種と国を同じ段階論の枠組みから把握している。つまり、人種の段階論と社会の段階論が併行している。そのため、初期福沢の人間に対する認識は、人間そのものを独立した存在とみなすことではなく、「どういった人種の人」や「どこの国の人」など、集団的、かつ段階的な認識を帯びる。人を国籍別に区分して格付けることや、国の説

明に於いて国民の人種について論じることが、福沢の初期著作の中でしばしば現れている。西洋各国の説明を述べる際に、同時に人種の起源について言及していることも、初期著作からしばしば見られている。

「羅馬の世に当て、「バタフィ（ヒ）ヤン」と唱る人種、荷蘭の地に住居し、好て戦争したるは、紀元前百年のことなり。其頃る近傍の地に在る「ベルギー」人は、草昧の世に於て既に貿易を勉め、此風習後世に博て荷蘭國貿易の基礎をなせり。」⁽³⁵⁾

「紀元四五百年の間に、日耳曼の北方にサクソンと云へる人種ありて英國に渡來し、次第に之を押領したり。此人種をアングロ・サクソンと称せり。」⁽³⁶⁾

また、国籍によって人を格付ける叙述も頻繁に現れている。

「五大州の中、亜弗利加、澳太利は下国にして、洲の内に国云ふ国もなく、住人も、生れ付知慧少なくて余り学問も出來ず、衣服其外諸道具を巧者に作る事をも知らず、先づ日本にて云へば蝦夷位のもなり。」⁽³⁷⁾

「亜弗利加、澳太利も其国の産物は多けれども、国人の生れつき愚にして学問の道開けず、道具仕掛の目論見も出來ず、一口にいへばつまらぬ国柄なり。」⁽³⁸⁾

「パナマの――筆者注）土地の人は愚にして、政府の世話も不行届なり。」⁽³⁹⁾

「和蘭人は質素儉約にて、学問にも商売にも出情するよき風俗あり。」⁽⁴⁰⁾

「此国（フランス――筆者注）の人は勇氣にて、何事をするにも手早し。且一体に華美なる風俗にて、芝居鳴物等を好み、食物よりも衣服の方に奢る者多し。即ち仏蘭西人の着倒なり。」⁽⁴¹⁾

このように、福沢の人間観はミッチェルの階級的、非平等的人種観を継承している。実際、福沢は初期著作に於い

て、兵書などでの物理的な「平等」という用語の使用以外、「平等」という概念について殆ど触れていない。⁽⁴²⁾ それに関連して注目すべきところは福沢の「階級」認識である。福沢は『西洋事情』外編で「階級」という用語を直接使用しながら、階級について自身の見解を述べている。そこで福沢は、ミツチエルの人間観に明確に現れる階級性を継承しているにも拘わらず、階級についてとても曖昧な態度をとっている。福沢は次のように述べている。

「東洋諸国にては、国民の種類を分ち、一種類毎に具りたる權威ありて、各々其職業を異にし、階級も亦上下の別なり。これを「ケースト」と云ふ。此風俗は往古よりの旧例にて、今俄に之を改めんとせば必ず混乱を生ず可し。「ケースト」とは人種の義にて、東印度のヒンドスタンに専ら行はるゝ風俗なり。猶支那日本にて士農工商四民の別あるが如し。凡そ世上に首長と配下と位を別ち、この外に階級あれば其階級に随て必ず其權あり。奴隸の法は文明の人に於て惡む所なれども、非常の暴政を以て小弱の買奴を抑壓せんとすれば、其主人にて之を保護することあり。是即ち買奴の法を以て人を救ふものなり。

右の如く人民の種類を分つ風俗は、蠻野の民間に在ては或は適當す可きこともあるべしと雖ども、文明の国に於ては、礼儀の道と宗旨の教とに由て巧に其弊風を除きたり。然りと雖ども、又こゝに莽昧夷俗の太古より世に行はるゝ別段の風俗あり。此風俗は、歳月を経るに従て啻に之を棄てざるのみならず、又隨て増補改正し、以て文明開化の一大助と為したるものなり。今英國に於て尽善尽美の制度と称するものも、其本を尋れば往古の風俗より來りしもの多し。⁽⁴³⁾」

まず、福沢は階級を「弊風」と言い、明らかに悪習として捉えている。その上で、古くから残っている「別段」の風習が未だ残っているものの、階級は野蛮な風俗で、文明国に於いては階級のような野蛮な「弊風」が存在しない、と述べている。「然りと雖ども」、「別段」は古くから世に行われてきて、今の文明開化の国でもそれを改正や増補し、その風俗を生かしていると福沢は述べている。階級認識自体は悪習で西洋と東洋の差をつける一つの原因であるが、

しかし西洋でも変形した形でその風習が残っているという、「否定しながらも肯定する」曖昧な態度をとっている。この個所は、示唆するところが多い。西洋書物に人間の格付けが明らかにされており、かつ福沢自身もそれを自分の著作に引用し、また西洋にも階級が未だ存在していることを認めているにも拘わらず、福沢が西洋には階級のような「弊風」が除かれていると述べている理由は何であろうか。

一つは宗教が挙げられる。それは上の引用で福沢も言及している「宗旨の教」と関連する。前述のミッチェルの人種論の冒頭から分かるように、宗教において神様は地球に存在する全てを造った唯一な存在で、「human family」である我々人間も、神様が最初に造ったアダムとイブから誕生している。神様の下で人間は皆平等で、家族のような存在である。『西洋事情』初編の最初のページには五つの人種を描いている絵があつて、その絵の上に福沢は「四海一家五族兄弟」と書き加えている。⁽⁴⁾人間を五つの「族」に分けつつも、「兄弟」と書くことにより家族性をも強調している。福沢は、宗教性について、その種類や異端の区別など具体的な内容までは踏み入れず、「人間は神様により造られた存在」という宗教の大前提に注目し、それを受け入れている。それは福沢が欧米のもの、つまりキリスト文化圏の著作のみから宗教の概念を受け入れ、著作に反映していることから裏付けられる。福沢は初期著作に於いて多くの西洋書物から様々な概念を受け入れ、反映しているが、キリスト教以外の宗教の種類や概念を翻訳することはなかった。ミッチェルの地理書と比べても、ミッチェルが「宗教」章においてその種類を細分化し、且つその優劣をつけている反面、福沢はその部分を省いている。そのため福沢の言う宗教は欧米の宗教であるキリスト教であることが前提になっており、宗教による差別性や格付けも考える必要がなくなり、ただ「神様の下では皆は平等である」というキリスト教の基本的な性質だけが残る。上で述べた「兄弟」や「四海一家五族兄弟」の精神も、人種や宗教の種類などを全て除き、キリスト教のみに基づいた認識なのである。他にも、例えば『西洋事情』初編でのアメリカの紹介において、福沢は独立宣言書を訳し「天の人を生ずるは億兆皆同一轍にて、之に附與するに動かす可からざるの通

義を以てす。即ち其通義とは人の自から生命を保し自由を求め幸福を祈るの類にて、他より之を如何とす可らざるものなり。⁽⁴⁵⁾」と、神様の生んだ人間は平等、生存、自由、幸福などを求める存在だと述べている。これはのちの有名な『学問のすゝめ』の「天は人の上に人を造らず……」の本となる文章であるため、⁽⁴⁶⁾単なる引用文にとどまらず、初期福沢の意図が含まれていると見た方がよからう。また、『西洋事情』外編では「人間」という章を立て、「人の生ずるや、天より之に與ふるに氣力を以てし、之に附するに性質を以てし、此氣力と性質とに由て、外物の性に應じ、以て身を全して、朝露の命を終ることを得るなり。⁽⁴⁷⁾」と、天から与えられる氣力と性質をもって生きていく存在として人間を定義している。その天性に従うのが人間の「基本」、及び「役割」であり、それに反する社会を作っていくならば必ず弊が現れるはずと福沢は述べている。⁽⁴⁸⁾「人間」章に続く「人生の通義及び其職分」章では、「天より人に生を與れば、又従て其生を保つ可きの才力を與ふ。然れども人、若し其天與の才力を活用するに當て心身の自由を得ざれば、才力共に用を為さず。故に世界中、何等の國たるを論ぜず何等の人種たるを問はず、人々自から其身體を自由にするは天道の法則なり。即ち人は其人の人にして猶天下は天下の天下なりと云ふが如し。⁽⁴⁹⁾」と、天より誕生する人間は人種を問わず自由な存在であると述べるが、続いての「貴賤貧富の別」章では「人の生命を保ち自由を求め、身を重んじ物を有するの理は、億兆の人民同一轍にして其別なしと雖ども、人の氣質と才力とに至ては然らず。或は類敏活潑なるあり、或は愚鈍懶惰なるあり、或は謹慎勉強するあり、或は放奢淫佚なるあり、或は強あり、或は弱ありて、人々の天稟必しも一樣ならず。……概して之を云へば人の知らざる所を知る者は人を制し、人の知る所を知らざる者は人に制せらるゝの理なり。⁽⁵⁰⁾」と、階級を認めている口調を見せている。神様の下では平等で自由なはずの人間だが、実際の世界ではあらゆる格差が生じ、それにより格付けが生じるという認識である。

福沢が西洋文明国の階級性を否定したもう一つの理由は西洋諸国への支持であった。既に階級を「悪習」と規定している福沢は東洋と西洋の比較を通して、階級が残存している東洋とそうでない西洋との比較を通して、西洋を高評

価している。それはミッチェルの著作に現れるヨーロッパ、アメリカへの高評価、また福沢本人の西洋経験等によるものであった。ここではその一例として条約改正を取り挙げる。初期福沢は、日本が西洋諸国と結んだ条約に対しても否定的な考えを持たなかった。前述した通り、『唐人往来』の頃から福沢は日本が西洋諸国と条約を結ぶことについて反感を持たず、むしろ無条件的に西洋を敵対する風潮を批判している。既に書物や直接訪問で西洋を経験し、その実態を確認している福沢にとって、西洋は未知の世界ではなかったであろう。『條約十一國記』で福沢はこの次のように述べている。

「条約とは約束といふことにて、此国と彼国と永代睦じく附合、其国の産物をも互に売買すべしとの趣を固く取極たるものなり。其取極の箇条を証文に認て両国双方の間に取替せしものを条約書といふ。安政五年より今茲慶應三卯年まで、西洋の国々より日本に来て条約を結び、条約書を取替せしもの十一国ありて、其国の人々日本の交易場に住居する者も多し。然るに我国にて下々の人は外国の様子を知らず、外国人を見れば一口に唐人唐人といふ者多けれども、既に条約をも取結びし国のことなれば、唯其国の人を見る計にて、其人は何といふ国より来て其本国の模様は如何なる哉といふことを知らざるは、あまり不都合なるゆへ、この小冊子には其国々の大小、強弱、人情、風俗、政事の立方をも極々あらましに記して、条約十一国記と表題を附たるなり。」

条約の不平等性についての言及は見られず、むしろ、事情を知らずに条約を結ぶ事だけで外国人について無知な姿勢を批判している。上の引用で福沢の言う安政五年（一八五八）から慶應三年（一八六七）までの時期は日本が西洋諸国との条約を集中的に結んだ時期で、特に安政五年に日本がアメリカ、ロシア、オランダ、イギリス、フランスと結んだ「安政五カ国条約」には治外法権、関税率の不平等、片務的最恵国待遇などの不平等的要素が含まれ、その

改正は明治政府の先決課題の一つでもあった。また、福沢が同行した一八六二年の西洋使節派遣の目的は、安政五カ国条約の批准内容である大阪の開市と兵庫の開港の延期、新潟港の開港を他の港に変えること等、条約改正の交渉であつたが、福沢はそこで条約の不平等性を考えることなく、むしろ西洋文明の発達に深く感銘を受けた。こういった福沢の条約認識は、時間が経つにつれて変化していき、一八八五年の時事新報社説「条約改正」では、次のように述べている。

「西洋諸国の人々が東洋に来て支那其外の国々に対する交際の風を察するに、其権力を擅にする趣は、封建時代の武士が平民に對するものと稍や相似たるが如し。東洋の諸港に出入する軍艦は即ち彼れが腰間の秋水にして、西洋諸国互に利害を共にして東洋の諸国を圧制するは、武家一般の腕力を以て平民社会を威伏する者に異ならず、嘗に言語應對の際に傲慢の氣を示して他を嚇するのみならず、貿易上の実利に就ても東西相對して明に不公平を見る可し。」⁽⁵²⁾

初期とは違って、西洋諸国と結んだ条約の不平等性を明らかに認識していることが見て取れる。初期福沢の西洋に對する寛大な目線が分かる事例である。

こういった宗教精神及び西洋文明への支持により、福沢はミッチェルの階級認識をそのまま受け止めながらも、階級認識自体は東洋の悪習で西洋にはないものであるという曖昧で矛盾する態度をとっている。それは彼の人間観にも反映され、初期福沢に於いての人間観は、宗教的観点からの平等——神様の下で人間は全て平等である——と人種的観点からの非平等性が同時に現れる。これは、ミッチェルの地理書自体が持つ全知全能な神様による世界像と、人種を基準にした人間の格付けから起因するものであった。

固より、この時期福沢が読んだ西洋書物が *School Geography* ~ *New School Geography* だけとは限らない。しか

し、同時期福沢が読んだとされる他の西洋書物には、このような人間観が現れていない。例えばこの時期福沢が読んだとされる「マッグロルコック氏地理韻府」⁽⁵³⁾は二〇〇ページ以上に達する辞書式書物だが、関連項目を引いてもミッチェルのような宗教的、階級的記述は書かれていない。また、ミッチェル地理書と共に福沢が参考にしたとされる「コーネル地理書」にも、そういった記述はミッチェル地理書に比べて極めて少ない。⁽⁵⁴⁾これにより、福沢の初期著作に現れる非平等的、宗教性を基盤とした「天賦的」人間観はミッチェルからの継承であることが確認できる。

(二) 削除

福沢のミッチェル引用において注目すべき点は、「日本」記述の削除である。

『掌中萬国一覽』の「人種の論」で、福沢はモンゴル人種に属する国として「支那」、「フヒンランド」(魯西亞領西北の地)「ラブランド」(同右フヒンランド北方の地)を挙げている。しかし原文には「The Chinese and Japanese comprise a large portion of the Mongol race. The Finns and Laplanders of Europe, also, said to belong to it」と書こつてあり、「日本」も含まれている。「フィンランド」や「ラブランド」には原文にはない注釈をつけてまで詳しく説明していることから考えると、これは福沢の意識的削除に違いない。福沢は『掌中萬国一覽』の「凡例」で「此書抄譯に係ると雖ども、書中毫も私意を交へず」⁽⁵⁵⁾と、自分の意見は全く反映せず抄訳に充実したと述べているが、実際には自分なりの工夫を加えていたことが、これにより確認できる。また「人種の論」の次に登場する、ミッチェル地理書の「THE STATES OF SOCIETY」の全訳である「蠻野文明の別」でも福沢の意識的削除が行われていて、「半開状態」の説明において原文には中国、日本、トルコ、ペルシアが主な国として挙げられているが、福沢は日本を削除し、「支那、土耳其」、「ペルシア」の如きは、其最も著しきものなり。」と書いている。さらに『世界國尽』の「亜細亞洲の事」章にも日本はアジア諸国として登場せず、また、後半部分「地理学総論」の文明の諸段階記述においても、同

じく日本は該当する国として登場せず、「支那、土留古、ペルシャ等の諸国」だけが挙げられている。⁽⁵⁷⁾ 福沢が世界を対象に書いた地理書の中で、日本は登場していない。初期著作全般にかけて福沢は、世界の一国としての日本について殆ど言及することがなかった。

どうしてこのような削除が行われたのか。削除の明確な理由は不明だが、一つの可能性として、福沢の世界認識及びその中で日本の位置づけから類推することができる。まずミッチェルが地理書で述べている日本についての記述はモンゴル人の説明、文明の諸段階において半開状態、それから国別記述についての日本説明である。内容は次の通りで、福沢の翻訳を借りた。

「其人の性情よく難苦に堪へ、勉勵事を爲すと雖ども、其才力狭くして、事物の進歩甚だ遅し。⁽⁵⁸⁾」

「耕作の法を知て稍や巧を致し、藝技の道を解して人間に有用の物多く、村落を立て都府を開き、文學頗る盛なりと雖ども、其人情、外國人を忌み、婦人を輕蔑し、小弱を凌ぐの風あり。⁽⁵⁹⁾」

「いまだ眞の文明開化には至らずして、なかば開けかゝりたるものなれども、蠻野に較れば遙に上等なり。農業の道よく行届て食物多く、藝術も進で次第に巧に趣き、都會を開き家居を飾り、文字學問の道も随分盛なり。但し嫉妬の心深くして他國の人を忌み嫌ひ、婦女子を輕蔑し弱きを苦しむる風あり。⁽⁶⁰⁾」

「女性はアメリカとほぼ同じ程の自由を満喫して、子供は男女とも細心に教育されている……活動的かつ聡明で、外国事情に詳し。⁽⁶¹⁾」

女性の待遇についての評価が矛盾しているところもみられるが、全体からみて、ミッチェルがみる日本人は誠実ではあるが愚昧なモンゴル人で、日本は文明開化の水準に達せず、半開の段階にとどまっている国であった。福沢の初

期著作に国の格付け作業が行われていることは上で確認したが、さらに福沢は既に海外で、そのような格付けを直接経験した。二度目の西洋経験であった一八六二（文久二）年香港での出来事について福沢はこう述べている。

「先年記者が英船に乗て香港に碇泊中、支那の小商人が靴を売らんとして本船に來り、頻りに乗組の人に勧めるゆゑ、記者も一足買はんもんおと思ふて値段を押し合ひ、船中無聊の余り態と手間取りて談判折柄、傍に居合せたる英人が此様子を見て情を知らず、又例の支那人の狡猾とでも思ひしことにや、手早く其靴を奪取て記者に渡し、二弗ばかりの金を出させて之を支那人に投与し、物をも言はず杖を以て之を船より逐出しければ、支那人は価の当否を論ずることも叶はず、一言もなくして恐縮するのみなりき。記者は固より他国人のことなれば、当時この始末を傍觀して、深く支那人を憐むに非ず、亦英人を惡むにも非ず、唯慨然として英国人民の压制を羨むの外なし。」⁽⁶⁴⁾

「文明国」である英国への憧憬がみてとれる。ミッチェルの地理書をそのまま引用すると、日本は半開の国として位置づけされる。これをそのまま日本の読者に伝えることができなかったため、福沢が自国に対する叙述を意識的に見送らせたとみることが可能性として挙げられる。あるいは、日本に対する強い愛国心の持ち主であったことを意味するかもしれない。初期著作全般にかけて福沢は「日本」を削除したが、決してそのことを忘れたわけではなかった。むしろ、世界中の日本の位置づけという問題意識を福沢は何より重要していた。福沢がこの問題について自分なりの主張をまとめ、論じたのは約一〇年後『文明論之概略』であって、そこで膨大な分量にわたって福沢は自分の日本論、日本人論を展開することになる。

福沢が「日本」削除を行つた第二の理由として「宗教」が考えられる。これは、前述した日本人の格付けとも関連

する問題であった。上で確認したように、ミッチェル地理書の中で日本人は優秀な人種として認められず、国も上等レベルに到達できず、半開な国として位置づけられていた。宗教の理念は、そのような秩序を不変にし、改善の余地をなくす思想的裏付けとなった。人間は神様により生命を賦与される存在で、各々生まれつきの性質を持って誕生するのだとすると、その人間が後天的な努力で何かを成し遂げる行為は、地球上の全てを造った全知全能な神様の意図に反することになってしまう。それはつまり、現在低い階級に位置づけられている日本の階級が、これからも改善のめどがたたないことを意味するのであった。福沢が人間を語るときに強調したことは神様によって与えられた気力、性質であった。こういった天性に従って生きていくことが人間の役目だとしていて、このような宗教的人間観はミッチェルの地理書にも現れているところであった。しかしそれが持つ「天賦的」性質は、現在の秩序を変えることも不可能にする不変な性質であったため、福沢にとってそれは障害物でもあった。

そこで、福沢の考えも次第に変化していく。『西洋事情』では人間を「天」が賦与する存在だと認識し、神様が賦与する「天性」に基づいて生きていく存在としての人間観を持った福沢だが、以降著した『世界國尽』では変わった論調が見られる。

「天然の地理は万代不易にして、開闢の始も今日も大ひに異なることなし。されども地球の面に生れたる人の了簡を以て、その地面を分ちその界を定て各政府を立れば、人民、共にその為筋を思はざるものなし。是即ち人間の地理に区別を生じ、世界中に国々の分るゝ所以なり。この区別は固より人の作りしものなれば、万代不易なるを得ず。争に由て師を起すものあり。野心を抱て国を盗むものあり。威力を以て土地を押領するものあり。是即ち諸国に盛衰興敗の変ある所以なり。斯く人の意を以て勝手次第に定めたる国の界は、必ずしも海陸山川の地理を目的とせず。或は唯双方の人の約束したる条約の書面に由てのみ其界を守ることもあり。」⁽⁶⁵⁾

人間は天然の地理とは違って、決まった性質がなく、争いを繰り返し、またそれにより世界諸国の盛衰興敗は変わるものと述べている。人間の不確実性や変化の余地を認めているのだ。これは以前の添付的人間認識に比べると変化した論調である。さらに、『啓蒙手習之文』で福沢は次のように述べている。

「人の種類の異なれば、貧富強弱異なりて、互に肩を並るは所詮難きに似たれとも、こは人心の自暴自棄、同じ四海の兄弟に如何で賢愚の別あらん。千辛万苦たえしのび学びすゝめば限なき万の物の理を窮め、理非黒白をわきまへて、徳義を修め智を開き天に垂ぐべき人の勇、々は強きに恐怖せず、仁は弱きを侮らず、西洋人もおなじ人、亜非利加人も同じたみ、稚きときに学ぶこそ国の富強の基なれ。」⁽⁵⁶⁾

世界の人間は皆賢愚の別もなく平等な存在で、西洋人であれアフリカの人であれ皆同じ「人間」であるとはつきり述べ、学ばずとも智を開くことができる⁽⁵⁷⁾と述べている。人間の性質は神様を基準にした「天賦的」性質から「後天的」に変わり、人間活動の余地を以前より広めている。そこで重要になってくるのが学び、つまり啓蒙思想である。

(三) まとめ

以上、ミッチェルと福沢の比較を通して初期福沢の人間観の分析を試みた。

ミッチェルの地理書から分かる人間認識は階級的、非平等、科学的、かつ宗教的人間観による人種別格付けであった。福沢は、こういったミッチェルの人間観を自分の著作に大部分引用することによってそれを受け入れていた。

「コンモン・エヂュケーション」時代の福沢にとって、人間は政治思想や哲学的に分析される存在ではなく、地理的、科学的観点から分析される存在であった。初期福沢の主な関心事が西洋の「物」であったことを考えると、人間も地

理的観点からの「物」として捉えられ、ミッチェルの *School Geography* と *New School Geography* はそういった福沢の人間観に大きな影響を及ぼした書物であった。福沢が継承し、自分の著作に反映した人間観は人種を基準とした人間の格付け、さらには国の格付けにもつながるような性質のものであった。そのなかで宗教は、科学と分離されず、人間区分の大前提として作動し、人間の格付けという「非平等性」と神様の被造物という観点からの「平等性」が同時に現れる。

しかし福沢がミッチェルの地理書から「日本」という単語を削除することで、ミッチェルの全ては受け入れなかった。その理由を類推するとまず、ミッチェル地理書に現れる日本、日本人の位置づけが低かったからである。日本人は知能が劣っていて発展が遅く、それにつれて日本は世界の文明国に属することできない「半開」な国であるというミッチェルの世界認識を、福沢は受け入れなかった。また、ミッチェル人間観に現れる宗教的不変性は、そういった秩序を固着するものであった。そこで福沢は、世界中の一国としての「日本」考察を見送らせると共に、その人間観も神様に従って生きる人間像から啓蒙的人間観、つまり世界の全ての人間を基本的に平等な存在だと認識し、学びによって人間の智慧の差が決まるという人間像へ移行していく。

四 おわりに——近代性の検討を考える——

小論の主な試みは福沢諭吉の初期人間観分析だが、この問題意識は「福沢の近代性とは何か」という問題意識から始まったものである。「近代性」を定義することは極めて難しい作業ではあるが、少なくとも、西洋哲学史や政治思想などで語られてきた近代的性質が、初期福沢の時代に至るまでも、確実に位置づけされず、揺れ動いていることが福沢の初期人間観分析から確認できる。例えば宗教からの独立は、中世政治思想の解体、及び近代政治思想の現実

的前提の重要な要素の一つとして語られ、その具体的な例として一六世紀の宗教改革などが挙げられているが、初期福沢の時代である一九世紀半ばに至るまで、宗教は科学と分離されず混用され、科学の一部として奇妙に結合していることが確認できる。小論で検討を行ったミッチェルの地理書には、一九世紀時代精神の揺れ動き平等と非平等、科学と宗教が同時に現れることで、一九世紀時代精神の揺れ動きが確認できる。また *New School Geography* の「人種」章の最後には「注意…このような区分によって人種のことを考察することを「民族学」というが、これは地理学とは違う学問で、詳しい理解のため分離して単独的に研究する必要がある⁽⁶⁸⁾。」と、*School Geography* にはない注釈がつけられている。地理学という科学的性格の書物から人間を独立させようとする動きがみてとれる部分である。

こういった近代性検討の脈絡からみると、初期福沢の時代は完全な近代と言えない過渡期であり、従って福沢が受け入れた近代性も過渡期的なものと言うことができる。しかし上にも述べたように、「近代性」を定義することは極めて難しい作業で、その特質明らかにすることだけでなく、その種類の究明も問題となる。上記で「完全な近代と言えない過渡期」と述べたが、その前に「過渡期」と言えるような近代性の軸を設定することすら容易な作業ではない。例えば、ミッチェルは著作で階層的な人種観を明確に現しているが、ミッチェルの時代は一般的に「近代」と言われる時代の最中である。ミッチェルの教科書はアメリカで最も広く読まれ、またミッチェル以外にも一九世紀の地理教科書はミッチェルのような階級秩序をもとに世界を説明しているものが一般的であり、一九世紀初イギリスの教科書も、ミッチェルのように宗教性を基盤に書かれた物が多かった⁽⁶⁹⁾。しかし近代と中世の最も大きな違いとして、宗教からの解放による身分秩序の解体が挙げられるのも事実である。このように一九世紀に至るまで階級秩序が定説として論じられ、また宗教も科学の一部として認められていることは、近代の性質を究明するに当たって極めて興味深いことである。

以上のように、福沢とミッチェルの関係を検討することは、初期福沢の人間観が「人種観」に近い性質を帯びてい

る事実の究明の他、「近代性」をめぐる様々な議論の手がかりとなっている点からも、重要な意味を持つと言えることができる。

- (1) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一七巻(岩波書店、一九七〇年)、六四頁。
- (2) 松沢弘陽「社会契約から文明史へ」(『福沢諭吉年鑑』第一八号、一九九一年)、一九三頁。
- (3) 正式名は *Mitchell's School Geography: A System of Modern Geography, Comprising A Description of the Present State of The World, And Its Five Great Divisions, America, Europe, Asia, Africa and Oceania, With Their Several Empires, Kingdoms, States, Territories, ETC.* 以下略。
- (4) 正式名は *Mitchell's New School Geography: A System of Modern Geography, Physical, Political, and Descriptive; Accompanied by A New Atlas of Forty-four Copperplate Maps, And Illustrated by Two Hundred Engravings* 以下略。
- (5) アルバート・M. クレイグ著、足立康訳『文明と啓蒙——初期福沢諭吉の思想』(慶應義塾大学出版会、二〇〇九年)。
- (6) 前掲『文明と啓蒙——初期福沢諭吉の思想』、五八頁。
- (7) Wilson, James Grant and Fiske, John, *Apleton's cyclopaedia of American Biography*, 2 vols. Bristol: Thoemmes, 2002, p. 346.
- (8) クレイグ(二〇〇九)によると、旧版の最後は一八六六年である。しかし、慶應義塾福沢研究センター所蔵 *School Geography* が一八七一年版であることが確認されている。その中の「advertisement」には「In addition to careful revisions of the Atlas, three new full-page maps of new States and Territories have been given... Philadelphia, 1868」と「大陸の細心な改正」三枚の新しい州と領土の全面地図の追加が一八六八年九月に行われている」と記述されている。また、一八七二年版 *New School Geography* の旧版にのっている記述にも、「MITCHELL'S (OLD) SERIES OF GEOGRAPHIES, REVISED AND BROUGHT DOWN TO 1868」と、一八六八年まで改正が行われたとなっている。出版年度と内容の改正された年度との関係は明確に確認できず、のっている記述を考えると、*School Geography* の最終版は一八六八年と見る方が正しい。
- (9) *New School Geography*, p. 2.
- (10) 前者の場合は前掲『文明と啓蒙——初期福沢諭吉の思想』、六〇頁を参照。後者の場合は、福沢が直接著作の中で言及を

していて（慶應義塾編『福沢諭吉全集』第二巻、岩波書店、一九六九年、二三七頁、四五六頁、参照）新版と旧版の区別は特にしていないが、本文の内容やイラストから見て、新版に違いない。

- (11) 早稲田大学図書館所蔵の *New School Geography* は、該図書館の書誌情報によると一八六七年版となっている。しかしこの本には出版年度の記載がない（ミッチェルの地理書はすべてタイトルの部分に出版年度が記載されているが、この本はそれがなく、色鉛筆で「1865」と記載されている）。内容を見ると、日本の人口を説明する所に「Population in 1882, 34, 338, 000」という記述がある（三八一頁参照）。従って、この本の出版年度は少なくとも一八八二年以降と見た方が正しい。

- (12) 『西洋事情』初編は旧版、それ以外の著作では全て新版を引用している。

- (13) 前掲『文明と啓蒙——初期福沢諭吉の思想』第2章参照。

- (14) *School Geography*, p. 6.

- (15) *New School Geography*, p. 8.

- (16) *School Geography*, p. 233.

- (17) *School Geography*, p. 297.

- (18) 前掲『文明と啓蒙——初期福沢諭吉の思想』第2章「アメリカの地理教科書」を参照。

- (19) *School Geography*, p. 6.

- (20) *School Geography*, p. 9.

- (21) *School Geography*, p. 21.

- (22) *School Geography*, pp. 46-49.

- (23) *School Geography*, p. 48.

- (24) *New School Geography*, p. 45.

- (25) *New School Geography*, p. 45.

- (26) 旧版には「Adam and Eve」と直接明記、新版には「the first created pair」と書いている。

- (27) *New School Geography*, pp. 32-34.

- (28) *New School Geography* にはない外見に関する記述は、おそらく『コーネル地理書にちきんたんにくさび』「shallow or olive tint, the hair is long, black, straight, and stiff, the head somewhat square, the

forehead low, the cheek-bones broad and flat, the nose short, the eyes small and obliquely set.] の記述やわづら。Cornell, S. S., *High School Geography: Forming Part Third of a Systematic Series of School Geographies*, New York: D. Appleton & Company, 1868, p. 11.

- (29) 前掲『文明と啓蒙——初期福沢諭吉の思想』第2章を参照。
- (30) 前掲『福沢諭吉全集』第二巻、四六五頁。
- (31) *New School Geography*, p. 7.
- (32) 前掲『福沢諭吉全集』第二巻、六五五頁。
- (33) 前掲『福沢諭吉全集』第二巻、六六三頁。
- (34) 前掲『福沢諭吉全集』第二巻、五九一頁。
- (35) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一巻（岩波書店、一九六九年）、三四六頁。
- (36) 前掲『福沢諭吉全集』第一巻、三五三頁。
- (37) 前掲『福沢諭吉選集』第一巻、七三頁。
- (38) 前掲『福沢諭吉全集』第二巻、一二一頁。
- (39) 前掲『福沢諭吉全集』第二巻、一四八頁。
- (40) 前掲『福沢諭吉全集』第二巻、一七五頁。
- (41) 前掲『福沢諭吉全集』第二巻、一七九頁。
- (42) 慶應義塾図書館デジタルギャラリーの「デジタルで読む福沢諭吉」での検索によると、初期著作に於いて福沢が「平等」という用語を使っているのは『洋兵名鑑』で二か所、『英國議事院談』で一か所に過ぎない（検索日：二〇一六年九月一八日）。
- (43) 前掲『福沢諭吉全集』第一巻、四二四頁。
- (44) この絵は、コーネルの地理書からの引用であるが、コーネルの地理書の絵に「四海一家五族兄弟」のような記述はない。
- (45) 前掲『福沢諭吉全集』第一巻、三二三頁。
- (46) 慶應義塾ホームページの「慶應義塾豆百科」では、「最も有力なのは高木八尺、木村穀の両氏をはじめ多くの人々によって指摘されているようにトーマス・ジェファアソンによって起草されたといわれるアメリカの独立宣言の一節を意識したと

いう説がある。」と載せらる。 <https://www.keio.ac.jp/ja/contents/manehyaka/22.html> (検索日：二〇一六年九月二〇日)。

- (47) 前掲『福沢諭吉全集』第一卷、三八九頁。
- (48) 前掲『福沢諭吉全集』第一卷、三九〇頁。
- (49) 前掲『福沢諭吉全集』第一卷、三九二頁。
- (50) 前掲『福沢諭吉全集』第一卷、三九七—三九八頁。
- (51) 前掲『福沢諭吉全集』第二卷、一七一頁。
- (52) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第八卷(岩波書店、一九七〇年)、二一〇頁。
- (53) J. R. McCulloch, *A Dictionary, Geographical, Statistical, and Historical of the Various Countries, Places, and Principal National objects in the World*, London: Longmans, Green, and co., 1846. この時期福沢が読んだ西洋書物については松沢弘陽『近代日本形成と西洋経験』(岩波書店、一九九三年)、一九八頁を参照。
- (54) 『コーネル地理書』にはまずあらゆる地理現象を神様の仕業と関連づけるような記述は全くない。またミッチェル地理書の「人種」章に当たる「地球の人」章には、コーカサス人を「知能優秀で、高い道徳性の持ち主」と記述している以外、価値判断はされていない。「社会の諸段階」認識はミッチェルと同様で(ミッチェルの五段階に比べて、コーネルは三段階に区分している)、宗教に関しては別の章を立てず、幾つかの種類について記述している。
- (55) 前掲『福沢諭吉全集』第二卷、四五六頁。
- (56) *New School Geography*, p. 38.
- (57) 前掲『福沢諭吉全集』第二卷、六六四頁。
- (58) *New School Geography*, p. 33. 福沢の翻訳を借りた。福沢の訳は前掲『福沢諭吉全集』第二卷、四六二頁。
- (59) *New School Geography*, p. 38. 福沢の翻訳を借りた。福沢の訳は前掲『福沢諭吉全集』第二卷、四六四頁。
- (60) *New School Geography*, p. 38. 福沢の翻訳を借りた。福沢の訳は前掲『福沢諭吉全集』第二卷、六六四頁。
- (61) *School Geography*, p. 301.
- (62) *New School Geography*, p. 381.
- (63) 版を重ねるにつれて、ミッチェルの日本評価は変わっていく。一八八二年版の中で日本人の人類は一八七二年版の「モンゴル人」から「中国、マレー、アイヌから派生した混合人種」に変わり、「活動的、賢明、進歩的」と述べられている。ま

た、鉄道と電信導入の記述も新しく追加され、「近代文明の大部分の要素が導入されている」と記述されている。*New School Geography* (1882), pp. 381-382.

- (64) 前掲『福沢諭吉全集』第八巻、六五頁。
- (65) 前掲『福沢諭吉全集』第二巻、六六三頁。
- (66) 前掲『福沢諭吉全集』第三巻、一三頁。
- (67) 福田歡一『近代の政治思想——その現実的・理論的諸前提——』(岩波書店、一九七〇)、六一—六八、七七—七九頁。
- (68) *New School Geography*, p. 34.
- (69) Marsden, William Edward, *The School Textbook: Geography, History, and Social Studies*, London: Routledge, 2005, p. 33.

姜 兌琬 (カン テュン)

所屬・現職 慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程

慶應義塾福沢研究センター調査員

最終学歴 慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程

専攻領域 日本政治思想史